

孫文の「大アジア主義」講演をめぐる解釈論について【サマリー】

木村実季

中国の国父とされる孫文は、1924年（大正13年）11月に神戸で有名な「大アジア主義」講演を行っています。この講演の内容は、その後の歴史状況の中でさまざまに解釈され、また利用されてきました。この講演が多様な解釈を許容するような背景をもっているからであり、孫文の言説そのものが多義的だからでもあります。本稿では、この講演に対する戦後における一般的な受け取り方を踏まえた上で、この講演における孫文の“真意”をめぐってなされた日本の研究者たちの研究、特に1990年代の論争を中心に、その論考の跡を辿ります。そして、孫文の「大アジア主義」講演に対する戦後の通念が妥当なものであるのかどうかを考えてみます。